

幼稚園百三十年記念 アーカイブズ 『幼児の教育』(2)

こども
幼児の
きんしゃ
汽車遊
び

和歌子

廣々とした庭園や野原に遊んで駆け廻つて居つて、さへも其活気が溢るゝばかりの幼児達、今日は昨日より降りつづいてまだやまぬ雨の為に、此處幼稚園(在東京市)の一室に籠城しなければならぬ事になりました。従つて室の隅から隅まで幼児の元気でみちみちて居るやうな心持がいたします。初のうちには窓から首を突き出して、「雨コンコン止ンデクレ」と三四兒が聲を揃へて唱へて居りましたが、

やがて三十餘の幼児はそれぞれいろいろの遊をはじめました。あちらではオカツバサンの中央をチヨイと結へて鼠の尾のやうなオサゲを戴き白金巾の前垂をかけた之でも組中では年長な株の一女兒が主婦となり、四五の男女兒が子供になりて飯事が盛んに行はれて居る。こちらの隅では只一兒一生懸命に積木をして居るものがある。又繪本を前に二三兒が何か話し合つて笑つて居るものもある。五六兒を集めて自

分は宛然先生を氣取つて話をしたり唱歌をさせたりして居る兒もある。竹切を劍にした小兵士を操縦して居る小士官もある。そうこうして居るうちに最も複雑に大仕掛にはじめられ永い時間つづいたのは汽車遊びでございました。

まづ初に年長株の二男兒が何か相談らしい事をして居りましたが、やがて其邊にあつた十餘脚の腰掛を持って来ては向ひ合せ合せにくつつけて排べます。

あんなに長くつづけて何をするかと思つて見て居ますと、最後に一番端の一脚だけは通常に置かず立てて置きました。ハハー汽車の煙突かしらんとおて居りますと、果して其次の處には積木のはいつて箱を置きました。これは石炭でここは機関車なので。

さて列車ができ上がると技師は化して乗客募集がかりとなり、室の各方でいろいろの事をして居る幼兒達に、「汽車ニオノリナサイ」と勧めてまはります。「ハイ」と来るのもあり、「アタシ今オバサンゴツコシテマスカラ」とことわるのもあるのを、頼み廻

つてやつと十餘人の乗客ができて乗り込みました。

すると今度は切手賣兼改札係が乗客の中からも二三人現はれて、長方形の木片を「チヨキツ」と口で言ひながら一枚づつ配つて廻る。之がすむと一人が

「ボー」と言ふ。二三人が「ガタンガタン」と言ひながら兩手を大きく前後にまはす。之は車輪のつもりなので。此際には改札係が何時の間にか驛長にも車掌にも機關手にもなりすまして居るので是れ即ち發車である。乗客の中では私が先生兼阿母さんに

推され「ココは一等イトコデス」といふ處に乗せて貰つて居る。「ガタンガタン」をまじめに一生懸命につづけて居るのはとりもなほさず進行中なので、私が「此汽車はドコカラ来タノデスカ」と問

ふと、「新橋デス」と答へる。此語に連想して一兒は忽ち一同に向かつて「汽笛一聲ヲオウタヒナサイ」とすすめる。皆歌ひ出す。之に誘はれて今までの

他の遊をして居つた幼兒も皆追々集つて汽車に乗る。とうとう室中の幼兒が皆汽車中の人になる。す



こし立つと「サーココハ上野デス」とふれてまはる。「御辨當オベントー」と木を箱にいれて賣るもの。「オモチャヤオモチャー」と其邊にある玩具を賣るもの、「本ヤ本ヤー」と繪本を賣るものなど様々である。次に又「ガタンガタン」をはじめ、すこしして「大久保、大久保」と呼ぶ。「皆下りテ躑躅ヲ御覽ナサイ」と言てまはる。私をはじめ一同下車する。機關手車掌一同汽車はうちすておいて案内の勞を執り、「ホラコンナニクレイデス」と、をりしも机上の花瓶に生けられてある躑躅の花を指す。「クレイデスコト」などと言つて居ると、「今度は名古屋二行キマスカラ早くオノリナサイ」と親切にも知らせて呉れる。即ち乗る。「ガタンガタン」がはじまる。「エ——名古屋二行ク時ニハ富士ノ御山方見エルンデス」とふれてまはる兒がある。「ドレドコニデスカ」と問ふと「ホラ御覽ナサイ」と大急に駆け出して往つて黒板に白墨で富士山を書く。車掌先生二三人また駆け出して、面白がつて書く。

忽ち、富士山が三も四も見ゆる事になる。立ち歸つて又「ガタンガタン」をはじめ「日光、日光」と呼び、「モー下りテ下サイ」と一同に言ひ皆下りる。

次で客車も機關車も烟突も皆元の腰掛にかへり此遊は終りました。

其翌日も亦雨天で、やはり室内で右のやうな汽車遊がはじまり、二度目の事として乗客も勝手が分つたと見えて、車掌其他の人の命令規律によく従て居りました。そうして此日には重に大森、横須賀を呼び、前にあつた發車、進行、辨當賣などの事柄の外に新しく、「モー夜ニナリマシタ」「サーモーオキナサイ」「サーモーオキナサイ」などと乗客にふれてまはる事が加へられ、前に木片なりし切符は紙片に改良せられ、私の居る處には「先生ノトコハキレイニシテ上ゲマセウ」とて、車室に（實は腰掛のよりかかりに）繪をぶら下げました。

又二三日の後雨天の日に、第三回のが企てられましたが、其時には以上の事柄の外に「ピシヤン」と

言ひながら客車の戸を開閉する事、「暗イカラアカリヲツケマス」とことわりながら客車の方々に来て上に向いては、「バチツ」と燧寸を擦り燈をともし事が加はりました。

右はまるで辻褃の合はぬ大人の夢の話の様ではございませんが、其背理的で大人からは可笑しい處のまじつて居りますのが、それが即ち幼児の幼児たる處で、遊嬉は實に幼児の生命である。と申しますが、此汽車遊をひとついたしまして、幼児は幼児だけの規律を守つてする事でございますから、規律に従するといふ習慣も養はれますし、多勢ですることでございますから、相互の協同一致といふ分子も無論必要でございますし、一緒におもしろく遊べば遊ぶほど社交的感情も他愛の感情も温まりますし、其邊にある物をいろいろに利用するのでございませうから、思考工夫の力も養はれます。かく數へ立てますと此汽車の遊びから幼児達が受けた利益はなかなか少くはございません。又違つた側から考へ

ますと、「幼児はこういうふ事に興味をもちます。こういうふ事を観察記憶して居ります。こういうふ風に思想を發表します。」といふやうな事を、幼児自ら演じて私の目前に提出して居る事にもなりますから、私た此遊を見て感じた興味も一方でなく、又參考の材料にもなつた事でございます。

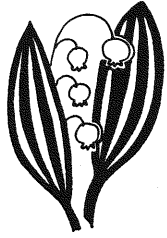
序に書き添へますが、それは、此遊は私が別に指図めいた事を少しもいたしませんで、幼児になりて遊んだのでございますから、従て此遊は全く幼児の力で企てられ考へられ實行せられましたので、衆兒は自由意志を實行する事のできる為に非常の愉快を感じ、一回一回と其しかたや事柄が進み、且つ注意の継続の短い幼児の集合であるにも拘らず、第一回には一時五十五分間、第二回には一時十五分間、第三回には一時五十分間といふ風に幼児としては永く注意がつづけられ興味を有つて居つた事でございます。



* * *

この記録は一九〇三（明治三六）年の「婦人と子ども」（本誌の初期の名称）第三巻第七号に掲載された。六月号にちなんで、雨の日の保育である。国吉^註によると「おそらくこれが日本で最初に活字の形で報告された保育の記録」であるらしい。しかし、この記録の仮名遣いや言葉遣いなどもし現代風に修正されていたら、一世紀以上も前のものとはまずわからないだろう。

子どもの言動をとらえて「辻褄の合はぬ大人の夢の話の様」ではあるがそのような「遊戯は実に幼児の生命」である、という見方は先端的である。また自主的な遊びにおいて「規律に服従するといふ習慣」「他愛の感情」などを学習できるのだという目的志向的な考察をする一方で、「幼児自ら演じ



て私の目前に提出している」ところの「興味」「観察記憶」「思想」について「参考の材料にもなった」とする、関係的な省察の姿勢もあることに驚かされる。保育史の常識からすると、この頃はまだ恩物は箱の中に大切にしまわれていたはず、また小刻みな時間割で生活が細分されていたはずなのである。その意味でこれは「記述された保育の歴史」を裏切っている」記録なのだと言吉はいう。（編集部）

註

国吉栄「子ども理解と歴史」森上・浜口編『子ども理解と保育援助』二〇〇三 百九十九―百九十三頁

☆この連載は、日本の幼稚園創設百三十年を迎え、本誌の昔年の記事を振り返り、現在の私たちの立ち位置を確認する作業の一助にと企画しものです。